

本物のTechnologyを守る精神を語る

五十殿侑弘

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■人生設計は子供時代から

1939年に東京に生を受けたのが構造研究者おみ かゆきひろ五十殿侑弘さんだ。機電技術者をしていた父が、自宅の増築図面を描いたとおりに建物が出来上がっていったので小学生ながら感激。工学なら早稲田大学高等学院に行こうと決めた。成績優秀なら希望の学科へ進めると聞き一生懸命勉強した。初心貫徹、早稲田大学理工学部建築学科へと進む。自信がある五十殿さんにしてできる学生がいると感じてデザイン系は諦めたそうだ。最初は設備を選択するが、後に構造に転向したのは「これからは超高層の世の中になるだろう」と、狙いを定めたからだ。幼いながら将来の仕事イメージして学校を決め、最新の分野に目を向ける。元来、先見の明をもつ人なのです。

就職にもその能力を活かして、鹿島建設を選んだのかと聞くと、「本社が東京駅にあったからですよ」と笑いを誘う。ムードメーカーなのも流石スーパーゼネコンの技術者。経済先導の時代で社会の変わり目の頃。建築設計では今一步だった鹿島建設を、故 鹿島昭一相談役の下、見事に押し上げる原動力の一員となった五十殿侑弘さんなのです。

■自身のグローバル化

入社時の配属先は建築企画部。そこで重役会の資料づくりや、トップの営業に触れた研修期間が経営に携わるための天の計らいだったかもしれない。面白いのが現場研修の話。名古屋支店が請け負った都市銀行の支店新築工事に応援に入る社命が下りた。が、その現場には先輩社員は誰もいなかった。何もわからない新米が、曳家からRC造+S造の現場監督をすることになったのだ。手配や段取りを「大工さん」が教えてくれたのだという。竣工して五十殿さんは体験した研修と提案をレポートに書いて会社に提出した。余計なことをすると怒る次長とは対照的

に、部長は大いに認めてくれたそうだ。

1978年から2年間を、ニューヨークの構造事務所と鹿島現地法人で過ごす。これが自身の「グローバル化の時代の幕開けだった」と語る。海外勤務の経験はシンガポールでのパークウェイパーレードビルの受注へと結びつく。そして「スーパーRCフレーム構法」で2004年に日本建築学会〔業績賞〕を受賞した。これはアメリカで柱のない開放的な居住空間を実現した「センターコア+フラットスラブ架構」を見て、衝撃を受けたことに始まる研究なのだった。

ホテルオークラ別館新築工事の構造設計業務は忘れられない。谷口吉郎建築設計研究所とオーナーの強い思い入れのある建物を、武藤構造力学研究所に向向し構造設計と監理の責任者としてつくったのだった。

■小堀鐸二研究所の精神を継いで

小堀鐸二研究所は、世界に先駆けて制震構造理論を提唱する新会社として1986年に設立された。京都大学を退官後に鹿島建設の副社長に就任していた、小堀鐸二先生の熱い想いを鹿島が理解を示したものであったという。2007年に、後継者として五十殿侑弘さんは社長を任命される。在任中は風力発電の事業化支援、パラレル構法の開発に尽力して、国土交通省から国土技術開発優秀賞を受賞（平成19年）した。東京都庁第一庁舎の耐震補強から、お台場のハザード設計指針の作成にも大きな貢献をする。2017年より中島正愛京都大学名誉教授に同社の将来を託し、現在も研究所の相談役として、「構造技術者は日本の耐震構造の基盤を確立してきた小堀先生他偉大な構造家達の遺志を引き継ぎ、地震災害の軽減に努めなければならない」との強い意志で研究者としての日々を過ごす。

「人との巡り合いが素晴らしい仕事人生をつくってくれた」。当然趣味は「研究」なのであるが、「仕事を道楽に」を信条にしていると聞いて、覇志堂も思わず唖ったのでした。

